HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	高等教育機関におけるアイヌ民族へのマイクロアグレッション
Author(s)	北原, モコットゥナシ
Citation	アイヌ・先住民研究, 3, 3-33
Issue Date	2023-03-01
DOI	https://doi.org/10.14943/Jais.3.003
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/88282
Type	departmental bulletin paper
File Information	04_3_Kitahara.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

アイヌ・先住民研究　第３号　2023　p.003–033　ISSN 2436-1763
Aynu teetawanoankur kanpinuye (3) 2023　p.003–033　DOI 10.14943/Jais.3.003

【論文】

高等教育機関におけるアイヌ民族へのマイクロアグレッション

北　原　モコットゥナシ*

要　旨

本稿では、アイヌ民族の就労・学習環境のうち、大学組織を例にマイクロアグレッションの態様と対策を検討する[1]。大学におけるマイクロアグレッションは、教職員から同僚へ、教職員から学生へというケースに加え、学生から学生へ、学生から教職員へというケースも存在する。学生の認識が形成された過程について本稿では詳しく検討していないが、言動の内容としては教職員が発するものと酷似していること、一部に保護者や教職員を含む社会の認識を取り込んだ経験が語られていることから、学生の発話は社会全体の認識を映していることが予想される。大学を構成する者に、マイクロアグレッションのタイプや発生過程、その影響、眼前で発生した際の効果的な介入を啓発することで、予防や事後的な対応が可能になると考えられる。

キーワード：アイヌ民族、和人、マイクロアグレッション、差別解消

はじめに

2019年5月に施行された「アイヌの人々の誇りが尊重される社会を実現するための施策の推進に関する法律」（通称「アイヌ施策推進法」）第4条は、アイヌ民族に対する差別を禁じ、差別解消に向けた努力を、すべての国民に求めている。この法の制定・施行以前にも、2014年の「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」（通称「障がい者差別解消法」）や、2016年の「本邦外出身者に対する不当な差別的言動の解消に向けた取り組みの推進に関する法律」（通称「ヘイトスピーチ解消法」）など、差別の規制・解消を目指す法律が相次いで制定された。ただ、いずれの法律も、制定によってただちに様々な問題が解消するわけではなく、法に実効性を持たせるためには、更なる議論や運用を通じた不断の取り組みが求められる。アイヌ施策推進法については「差別」が意味する内容に十分な議論がなされておらず、施行後3年を経ても、同法に基づく差別解消

* 北海道大学アイヌ・先住民研究センター

1 本稿の査読の過程において、マイクロアグレッションと近い概念であるレイシャルハラスメント（前者は差別による被害に、後者は加害性に注目して用いられる）の方が、本稿の趣旨に近いのではないかというコメントをいただいた。査読者には、貴重なご指摘に感謝したい。マイクロアグレッションという語の日本社会における受容のされ方では「些細」に思えるために差別と見なされない言動も被害を生む（加害性がある）点が重視されていると考える。本稿でも、読者にこの点を強く印象付けたいという意図から、この語を用いることとする。

の具体的な動きや効果は見えてこない[2]。

社会に人権思想が浸透し、性別や性的指向、体質（いわゆる「人種」）や体形などに関する揶揄・侮蔑には、厳しい批判が向けられるようになってきた。そうした指摘・批判は、公人の発言からテレビタレントまで幅広く向けられ、これまで「冗談だから」と見過ごされ、正面からの批判が難しかった状況に変化が起こってきている。何より、視聴者のみならずテレビタレントなど発信者の意識にも、変化が起きていることに希望を感じる。その背景には、本稿で取り上げるマイクロアグレッションや、SOGIハラスメント、ルッキズム、カラーブラインド、回避的レイシズムなどの言葉や概念が共有され、様々な立場・経験と結びつけて理解され、浸透してきたことが大きく影響しているであろう。

とはいえ、こうした言葉が注目されるということは、問題が解消されていないということでもある。レイシャルな差別についても、民族としての存在そのものを否定する、被差別者を悪魔化し批判を装うことで差別性を否認するなど、様々な現れ方をしている[3]。また、批判を封じるために、あるいは明確な差別意図がなくとも思わぬ形で加害をしないようマイノリティに言及・接触することを避け（回避的レイシズム）、あるいはそうした差異そのものを見ないことにして距離をとる傾向もある（カラーブラインドネスに類するもの）。それらが、差別の実態や防止についての議論の機会を遠ざけ、結果的に意図しないものも含めた排除・疎外を放置することにもつながっている。

本稿では、アイヌ民族に対する差別・疎外と、その解消についての議論を進展させることを目的として、労働環境におけるマイクロアグレッション概念と、その事例を紹介する。主として札幌近郊の高等教育機関（複数の国立大学、私立大学）における事例を取り上げる。特に教職員の間や教職員から学生に向けた加害のほか、学生から教職員へなど、一般的には「社会的弱者」と見なされる者から「社会的強者」に対して加害が起こるケースもあることに触れ、組織としてどのような対策を講じるべきかを述べる。

本稿は、個別の事例に対する告発を目的とするものではない。昨今、学内のアイヌ民族が置かれた環境について、より理解を深め改善しようとする機運が高まりつつあるが、それでも非アイヌに

2　例えば、マーク・ウィンチェスター氏（国立アイヌ民族博物館アソシエイトフェロー）は私信による教示の中で、政府が有識者と学識経験者による充分な調整権限と調査権限を備えた協議機関を設け、アイヌへの差別的言動について調査・審議し、差別の禁止に関する定義と措置等のガイドラインを政令などで定めること、などが期待されると述べている。そのための根拠となるものとして、同氏は参議院法務委員会の付帯決議に書かれた「不当な差別的言動の解消に向けた実効性のある具体的措置を講ずること」という一文を示している。こうした検討や機関の設置が早急に進むことが望まれる。

3　例えば、露骨な差別は、主に親しい者の間やネット空間など匿名性のある場面で起きている。また、筆者は小学生から社会人まで、授業や情報提供等を通じて接する機会がある。そこでは「アイヌは1つの民族として存在したことはない（2017年、社会人）」や「アイヌをからめて金儲けをする連中が嫌だ（2020年、小学生）」といった言葉を耳にすることがある。アイヌ施策を不要・不当とする一連の批判は、高史明氏が紹介した「現代的レイシズム」（マイノリティへの差別は既になく、格差はマイノリティの努力不足による、差別解消の訴えは過剰で、不当に過大な利益を得ている、といった信念に基づくレイシズム）に類するものだと考えられる（原2022）。上記の小学生の言葉は、これとの関連を思わせる。

とっては、問題の所在や性質が容易には見えてこない現状がある。このため、同じ就労環境に対し、アイヌは敵対的な要素を含んだ環境だと感じていても、非アイヌはレイシャルハラスメント関して言えばより楽観的に評価をしていることが多い。本稿で事例を取り上げる意図は、こうした問題やギャップを可視化し、対策を検討する端緒とすることにある。なお、関係者が特定されることにより、新たな問題や被害感情が生じる懸念もある。そのため、加害者・被害者のプライバシーに配慮し、各事例の細部には、問題の質が変わらない程度に情報の変更や省略をしていることを、あらかじめお断りしておく。

また、北海道大学では2022年4月に「アイヌ シサㇺ ウレㇱパ ウコピㇼカレ ウシ（アイヌ民族共生推進本部）」を設置した。同本部は、近年前景化してきたアイヌ民族の遺骨収集・返還の問題に限らず、より広範に大学内におけるアイヌ民族と和人の関係史を見直し、学内の環境をアイヌ民族に開かれたものにしていくことを目指している。その取り組みは1つのモデルケースとして、アイヌ民族と和人の和解に寄与しうるものであるとともに、他のマイノリティのみならずマジョリティにとっての環境改善にもつながることが期待される。本稿での検討は筆者が個人的に行うものであるが、同本部の事業にも寄与し、更に同様の研究・教育機関にも参照されうるものであると考える。

1．マイクロアグレッション概念と類型

ここでは、2020年に刊行されたデラルド・ウィン・スー（心理学、コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジ教授）の訳書、および金友子（2016）の記述に沿って、この概念を手短に紹介する。

マイクロアグレッション概念は、1970年代に、アメリカでの「人種」的な差別解消に向けた議論の中から生まれてきた。心理学者チェスター・ピアースによる造語だと言われる（スー2020：33）。これは、ヨーロッパ系のいわゆる「白人」からアフリカ系のアメリカ人に向けて発せられる日常的で些細に見える攻撃的な態度に注目したもので、2000年代に入ってから、デラルド・ウィン・スーによってふたたび詳細に検討・解説された。スーによる定義は、次の通りである。

> 「マイクロアグレッションとは、日々のありふれた言葉、行動、または環境の面での侮蔑的な行為で、意図的かどうかにかかわらず、有色人種に向けて彼ら・彼女らを軽視し侮辱するような敵対的、中傷的、否定的なメッセージを送る。マイクロアグレッションの犯人はたいていの場合、人種的／民族的マイノリティとの対話のなかでそうしたメッセージを伝えていることに気づかない」（金2016：108）

スーは、自らの民族的マイノリティとしての経験に加え、インタビューを通じて事例を蓄積し、マイクロアグレッションが「人種」に限らず、ジェンダーや性的指向、階級、障害によっても起こることを示した（スー2020：33）。今日では、更に多くの、社会的に周縁に置かれた様々な立場の人への攻撃的態度を考える際に適用されている。

マイクロアグレッションの重要な特徴は、知覚しにくく、問題化しにくく、かつ被害者の心身に

深刻な影響を与える点にある。

なぜ知覚が難しいのか。それは、マイクロアグレッションにあたる振る舞いが、社会の価値観、言語的慣習に深く根付いているため、発する者が明確な意図を持たなくとも半ば無意識に口をついて出たり、仕草として現れたりしてしまうためである。「蝦夷」や「酋長」など、本来は「野蛮人」としての意味を含み、明らかに侮蔑的な表現であっても、それが社会に定着すると、言葉の成り立ちが忘れられて疑問をいだかれることもなくなり、容易に発せられるようになる。

なぜ問題化しにくいのか。1つには、マイクロアグレッションの元となる他者への否定的な価値付けが、言葉の端々、文脈や口調によって表現され、受け手が違和感を覚えたとしても熟考しなければ違和感の原因に気付けないことがある。また、表情や仕草などの非言語的なコミュニケーションで侮蔑や拒絶が表現されることもあり、その場合には、言語的コミュニケーションに比べて表現者の意図を特定することが難しい。そして、それらは瞬間的に行われ、常に変動するコミュニケーションの流れの中に埋め込まれているため、流れを断ち切って問題化することには、ある種の「空気を読まない」思い切りが必要であり、通常それには大きな心理的抵抗がある。加えて、差別的な意図があったとしても極めてあいまいな形で表現されるため、表現者はその意図を容易に否定できる。また、意図がなくとも被害は起こるのだが、その構造はまだほとんど認知されておらず、差別者とは非道徳な者のことだという認識が一般的である。そのため、言動の問題を指摘された者は、大きく動揺し、加害者側が被害感情を持つことも少なくない（スー2020：88-108）。先述のように、今日では日本でも様々な差別を問題視する感覚が多くの人に共有されていると考えられるが、一方で「差別はあってはならない」という結論が先行し、何が人を傷つけるのかについては十分に検討や理解がなされてこなかった。そのため、人々は差別的な言動を指摘されることだけを恐れるようになり、慎重に話題を選んでコミュニケーションの幅を狭めたり、差別を指摘されると反省・悲嘆・逆上などの過剰な反応を示したりするようになった[4]。

なぜ深刻化するのか。上に見たように、発言者の意図や、問題がどこにあるのかが容易に特定できない場合、被害者は違和感を抱き続ける。多くの被害者が述べるように、明確な差別の方が解釈にかかる負担が少なく、対応もしやすい（スー2020：73）[5]。しかし、マイクロアグレッションの場合には、何度も繰り返して被害状況を想起し、解釈し、自分が考えすぎなのではないか、などと何度も自問自答するといった、苦痛を伴う作業をせざるを得ない。こうした問題は、立場を同じくする者でなければ理解することが難しく、時間と労力をかけて説明しなければ共感が得られない。多くの場合、マイノリティには相談できる理解者が得られないため、1人で葛藤を続けなければならない。そして、状況を理解したとしても、それを問題化し改善を促すことは容易ではない。

これに加え、マイクロアグレッションは発する側が意識しなかったり、ほめ言葉やジョークの形

4　これは、筆者及び本特集の他の著者の経験に基づく実感でもある。

5　脚注4に同じ。

態を取ったりしつつ、日常的に起こる。たとえ周囲のマジョリティが1度だけ口にしたとしても、マイノリティにとっては「周囲の人々から継続的に攻撃的な言動を受ける」体験となる。また、マイクロアグレッションが起こっていないときにも、次にいつ被傷体験が起こるかと警戒していなければならない。マイクロアグレッション（小さな攻撃）という言葉のイメージに反して、1度の加害がもたらす被害も決して小さくないが、それは被害者の内面に日常的に累積していく。ある1度の経験は、他者からは1度のことであっても、被傷者の内面では以前の体験・近しい立場の者の体験と結びつけられ「前と同じ苦痛がまた起こった」と感じられる。このように、複数の被害体験が結び付けられ連動することで、傷は深まっていく[6]。しかし、外からはこの心理的な動きが見えないことから、同じ体験を巡る加害者と被害者の理解は大きく乖離していくのである。

1-1. マイクロアグレッションの類型

先行研究では、マイクロアグレッションを表れ方によって、言語的なもの、非言語的なもの（表情・仕草）、環境的なものに区分し、さらに表現者の意識と内容によって3つの形態（マイクロアサルト、マイクロインサルト、マイクロインバリデーション）に分けている（スー2020：71）。

・マイクロアサルト

マイクロアサルトは意識的になされる行為で、侮蔑的な呼称やジョークを発すること、相手を避けること、他の者を優遇することで間接的に疎外すること、攻撃的・敵対的な環境をつくることなどが含まれる。差別という言葉から想起するものに最も近いが、いわゆる「いじり」など、発する者にとっては攻撃とまでは意識されない場合、攻撃を隠蔽している場合も含めて良いと考えられる。

マイクロアサルトは、3つの類型の中で最も古典的差別（悪意を持ち、それを隠さず直接的に伝える言動）に近いものである。差別の構造を社会学の立場から考察した佐藤（2018）は、差別が起こる状況を、差別者（加害者）と被差別者（被害者）に、協力者（同調・黙認する者）を加えた「三者関係モデル」によって説明している。差別的なジョークなどの言動には、直接的な加害のほか、それを共有する者同士の結びつきを強める効果があるという。これは、差別者が傍観者を同化していくプロセスであり、差別言動はしばしばそれを目的としてなされるともいう。こうした、差別言動は被差別者がいない所でも起こりうるもので、差別的な言動をしたものも、その場に対象者がいないことから特に罪悪感を持たないことが多い。こうした対象者がいない場での差別言動は、

6　小宮友根は、女性に特定の意味付けをする表象を、同種の意味付けを含む様々な活動の1つとし、こうした意味付けに問題を感じる者は、個別の出来事に通底する意味を読み取って、それらを結び付けながら解釈すると述べている。したがって、問題意識のない者からすれば特に関連がないように見える出来事でも、そこに内在する意味によって抑圧されている者には「また同じことがおこった」というように「累積的な問題として経験される」という（小宮2019：233）。本稿で扱う事例もこれと同じ性質を持っており、抑圧を受けてないものからすれば問題なく思える表現が、アイヌにとっては怒りや恐怖、徒労感、無力感を引き起こす。

相手に共感を促し、結びつきを強めることを意図している。その場に居合わせた者は、それを制さないことや同調して笑うことで、被差別者にとっての敵対的環境を強化することに加担させられてしまう。

忌避・回避の例として、アイヌ民族の場合には、アイヌ民族につながる話題を避けることや、学校での学習カリキュラムや就業先の活動に、アイヌ民族に関する内容が入ることを避けることなどが挙げられる。具体的には、アイヌ民族学習を行う際に、和人保護者が「なぜうちの子供を参加させるのか」とクレームを入れること、職場のユニフォームのデザインにアイヌ文様を用いることを拒絶すること、といった事例がある[7]。

・マイクロインサルト

マイクロインサルトは多くの場合無意識に行われ、無礼で気遣いのないコミュニケーションや、他者の民族的出自・文化の価値をおとしめる言動である。例えば、知的能力を出自に帰することや、二級市民扱い、異文化の価値観を異質なものと見なすこと、他者を犯罪者や潜在的に犯罪を起こしかねない者として扱うことなどが含まれる。典型的な例としては「あなたはアフリカ系なのに／女性なのに能力が高い」といった形の言動である。この言葉は相手を褒めると同時に、前提としてアフリカ系や女性といった立場が発話者よりも下位にあるという、見下しのメッセージを含んでいる。また、アフリカ系の住民が商店などに行くと、店を出るまでの間、スタッフから監視するような目を向けられるといった例もある。

アイヌ民族の場合では、アイヌ民族には知的能力を求められる職種に着くものはいない（はずだ）といった言動[8]や、商店に行くと店内に滞在する間ずっと監視を受けること、犯罪があったときにアイヌが多く居住する地域の住民がまず捜査を受けることなどが挙げられる[9]。

これらは他者に対する無意識の侮蔑であり、その根源は、自らの属性・社会的カテゴリーを正統・標準に位置付ける意識にある。こうした発想をする人は、性別や民族、階級といった属性ごとに能力の差があるという信念を持っており、それを背景として無意識のうちに自己の優位性を信じ、他者を半人前・無能力者と見なしている。そのような差別的な意図はないとしても、他者の文化を異質視することは、自文化を標準的・普遍的価値を持つものと見なすことと表裏の関係にある。したがって、他者を対象とした攻撃のみならず、自己・自集団への過信や礼賛も、マイクロインサルトと同じ被害を生む。

7　これらの事例は、学校関係者、教育機関関係者からの聴取による。なお、学校でも就業先でも、好意的な反応が決してないわけではない。ただ、好意的な反応があることによって、否定的な反応が相殺されるわけではないことを書き添えておく。

8　前職において、筆者が新聞の取材を受けた際の、記者の発言。

9　北海道で生活してきた知人からの教示による。前者は70代の個人、後者は30代の個人。

・マイクロインバリデーション

マイクロインバリデーションも無意識的に行われるもので、他者の心理状態や考え方、感情、経験を排除、否定、無化する。よそ者扱い（集団からの排除）、カラーブラインド（肌の色が見えない、それによる差異も無いと主張する）、社会的格差を能力の問題に帰する能力主義信仰、差別の否認などが含まれる。

図1と図2では、右の人物がマジョリティ、左の人物がマイノリティである。図１のように、近・現代社会では、マジョリティの公私における自言語・自文化の維持・運用が公的制度によって保障されており、また存在も公的に承認されているために、敢えてアイデンティティを意識したり表明する必要もない。マイノリティは、マジョリティの言語・文化を熟知しなければ公的空間には参入できず、常にその能力やアイデンティティのチェックを受ける。自言語・自文化の維持・運用は私的空間に限り、それも常に圧迫されている。そこで、マイノリティは図2のように公的空間ではその社会の諸言語・文化が尊重されるようにすることで中立化が達成されるが、マジョリティにはこうした現状が見えないため「被害妄想」や「過剰な要求」といった反応が返ってくることになる。

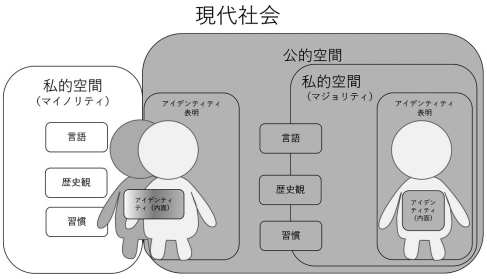

図１．近現代社会の状況

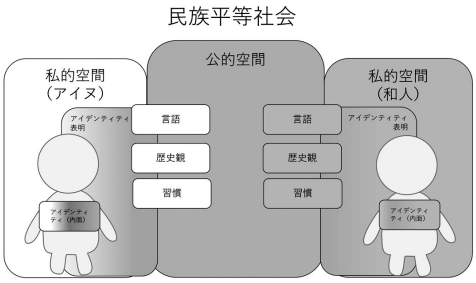

図２．平等社会

具体的な例としては、アジアやアフリカにルーツを持ち、アメリカで育った者が、英語の能力をほめられたり、頻繁に出身地を尋ねられたりすることによって異質視され、アメリカの「標準的で正当な国民」とは認めないかのような態度が表明されることなどが挙げられる。一方で、そのような疎外・排除などの経験を信頼せず、考え過ぎや被害妄想であると片付けることで無化することもこの類型に含まれる。

アイヌ民族の場合も、日本語がうまいと褒められたり、出身は北海道かと尋ねられたり[10]、一方でそのような経験を気にすることは被害妄想だと言われることなどが起こる。また「北海道には歴史がない」といった類の、アイヌの存在を初めから認めない言動もこの類型に該当する。

このようにマイクロアグレッションを類型化することで多様な加害・被害の認識が容易になる。

10　これらは本州で多く経験する事例である。北海道内では、アイヌ民族が多く居住すると知られている地域を指して「あっちの方の人？」という質問に変わる。

ただ、実際に発生するケースは、複数の類型に該当するものが複合的に起こることも多く、常にこれらのいずれかに振り分けられるわけとは限らない。

2. 大学におけるマイクロアグレッションの事例：教職員によるケース

次に、アイヌ民族に対するマイクロアグレッションとして、筆者の勤務する北海道大学や、非常勤講師として出講した複数の大学で筆者が接した事例（ただし、対象が筆者とは限らない）のうち、主に教職員が関与するケースを例示する。いずれも筆者が出講を開始した2005年以降に、アイヌや先住民族に何らかの形で関与する場面で発せられている（一部に非正規雇用者によって発せられた事例も含まれる）。マイクロアグレッションや古典的な差別は、筆者の関与しない様々な場所でも起こっていると聞き及んでいる。他の教職員が経験した事例を加えれば、さらに多様な事例があるが、報告者がリスクにさらされることや紙幅の都合もあり、本稿では取り扱わないこととした。いずれ、当事者によって報告されることもあるかも知れない。

取り上げた事例は主に、異質視（文化に対する野蛮視・劣等視、容姿に対する拒絶的態度、聖化[11]）、現状肯定（差別・支配の正当化、格差是正を「マジョリティ差別」と見なすこと）、マジョリティ中心的な感覚（無知、無理解、当事者意識の欠如）などである。具体的な事例としては挙げていないが、アイヌに対する存在否定・歴史否定や、アイヌを過去の存在とする言説もしばしば耳にする。

教員は研究職にあり、自他ともに良識と先端的な知識を持ち合わせていると見なされているが、こうした事例はそのような者であっても何らかの対策なしには加害を避けられないこと、加害の要因が人々の意識に広く潜在していることを示している。

2-1. マイクロアサルト

具体的な描写は避けるが、次のような中傷の形を取ることが多い。cは間接的な情報であり、他は筆者が直に接した情報である。

a「アイヌは何かというと恫喝する。それしかできない」

b アイヌ民族の学生を一律に指導や学位認定に値しないとして、指導を拒否する。

c（ある会議の構成員に対し、別の場面で）「何もわかっていないくせにアイヌだからと口を出す」

d アイヌであるという出自の表明に、冷笑で応じる（当事者性を否定する）。

e 複数のアイヌ民族が出席する会議で、特定の者にだけアイヌとしての発言を促す。

f 髭・髪容など容姿への嫌悪

11　対象を理想化することで実体とは違うイメージの枠に押し込め、そこから外れようとする者には非難を向ける態度。3-2-3で詳述する。金（2018）のpp.31-34も参照。

g「一致団結できないのがアイヌの民族性だ」

h「先住民族が行う研究は、どれもレベルが低い」

i「無文字文化はすぐに変化し、伝統を維持できない」

a、bは、劣等視の例。「粗暴で知性を欠く」者はどこにでもいるが、そうしたネガティブなイメージを、アイヌ民族のみに一般化する言説である。c、hもアイヌや他の先住民族を無能力者と見なしており、特にcは自由な議論の阻害や排除につながる。発している者からすれば正当な批判だと見なされている。批判する対象者と向き合い、具体的な論点を示し、暴力的でない方法で伝えれば、建設的な議論につながる可能性はある。そうでなければ、発話者の意図はどうであれ中傷と同じことであり、それを学問的批判の装いで覆い隠しているとも見えてしまう。dは、存在否定にあたる。eは、発話者の意に沿った発言をするアイヌにのみ発言を許し、そうでない者からは発言の機会や当事者性を根底から奪おうとするものである。fは、西洋化した和人の価値観を正統・標準とし、そこからの逸脱を野蛮視して攻撃するものである。和人の標準とされる身なりは、近代や戦後を通じて西洋社会に倣ったものであり、それのみを特別に尊ぶ理由はない。また容姿は、衣服だけでなく、個人によっては変えることのできない生来の体質とも結びついている。組織内で、特定のあるべき姿を定めることは、時として時間や労力を払いながらそれに合わせることを強要することにもなる。大学が価値多様性を標榜する時代に入りつつも、そこに勤務する者は、依然として固定的・マジョリティ中心的な価値観に強く縛られていることがここに表れている。そして、こうした価値観は学生にも浸透している。gは、ジョークとしてしばしば発せられるもの、iは典型的劣等視である。日本社会では伝統的に文字が支配層・男性に独占されており、文字を持つことが教養と権威の象徴とされてきた。したがって、非文字文化に対しては、近世期から異質視、劣等視する態度が顕著である。

このような言動がなされることを、信じがたい、発話者は特殊な人物だ、と感じるかもしれない。しかし、環境や条件次第では、誰もがこれに類する発言をする可能性があると意識しておくべきである。1つには、差別者と被差別者の関係について知識や認識が不足している場合、更にもう1つは、差別言動をしても反発や抵抗を受けないと予想されたときである。一例を挙げれば、その場に立場・利害を同じくする者（例えば和人）しかいないと判断されるとき、周囲が差別的な認識を共有しているか、あるいは同調すると見なされたときである。いわゆる「内輪ノリ」が成り立つときには、タガが外れやすくなる[12]。アイヌ民族に限らず様々なマイノリティと、学内の様々な場面で居合わせることが少なくないとしても、そのような認識はなかなか定着せず「ここだけの話」と

12　筆者はこれを、ホモソーシャルに近い環境だと感じる。ホモソーシャルは、ミソジニー（女性嫌悪）とホモフォビア（同性愛恐怖）によって、男性同士が非性愛的な結びつきを強め、他者（女性・同性愛者）を排除する環境を指して用いられる。このため、ホモソーシャル概念の議論自体には民族性は関与しないが、女性や同性愛者を民族的他者に置き換えても、同じ構造が成り立つといえる。

して不用意な言動がされることがある。

2-2. マイクロインサルト

a 研究発表の後で「アイヌにこのような話ができる人がいるとは思わなかった」
b「君は（アイヌの割には）とても冷静だ」
c「現代の我々も、自然と共生するアイヌ文化に学ぶべきところがある」
d「君は（差別を巡る議論では）感情的になる、冷静になるべきだ」
e「開拓によってアイヌも発展できたのだから、悪いことばかりではなかった」
f 髭、髪容、服装を、和人の「標準」に合わせると喜ぶ。

いずれも筆者が直接に経験したもの。aは、ある研究発表の場での発表をほめたものであり、女性研究者／学生に対し「君の研究は男性並みに良い」と批評するのに近い。b、cも上からの好意的・肯定的な意図を持って発せられたもので、アイヌに対する劣等視を含む。発話者は、友好的な関係を築くか、少なくとも害意がないことを示そうとしたのだと思われるが「アイヌは劣等で、論理性を欠く」などネガティブな特性を持つ集団、和人と対等ではない集団であるという前提の表明になっている。cは、中高生の作文などにもしばしば見られる表現で、注意して見ると頻繁に目にする定型的な表現であり、学生の感想にも頻出する。一見ポジティブな言説として、各年齢層に浸透していることがわかる。アイヌ民族について肯定的に言及される文脈は、こうした「自然との近さ」や「芸術性」「精神性」などに限定され、それ以外の部分、例えば近代以降の社会建設におけるアイヌ民族の貢献は全く顧みられていない。研究について言えば、もっぱら研究される「対象」として捉えられ、研究の主体と見なされることはない。こうした状況が、個々の発言が単独で持つ意味とは別な意味を形成する。すなわち、当事者にしてみれば「アイヌに関して評価すべき点はそこにしかない」と言われているのに等しく、そうした役割・イメージの中に固定され、それ以外の領域における活動・経験を無化する「聖化」と「存在否定」の言説として響くのである。加えて、こうした表現は、「現代人」と「アイヌ」を不用意に対置しているために、現代社会からアイヌを除外した表現にもなっている。

本学には、文学部に在籍した知里真志保教授や、出自を表明していない人々を含め、いつの時代にも複数のアイヌが所属し、学習や研究に取り組んできた。知里教授以外の活動はなかなか目につきにくいとしても、本学の教職員がアイヌについて言及するときに、学内のアイヌの存在が全く抜け落ちていることは軽視できない。それだけアイヌ民族についての無知・無関心が蔓延しているということであり「組織に求められていない、そこにいるとも思われていない」と感じさせる敵対的環境が形成されている。この中で発せられるｃの発言は、アイヌを学内における参画・貢献の主体とは見なしていないし、今後の参画も期待していないというメッセージを含んでしまう。

dは、マジョリティ・マイノリティ間の議論に頻出するもので、トーンポリシング（発話内容よりも言い方を批判すること）を含んでいる。発話者自身は冷静で中立なポジションに立っていると確信しているが、それは信念の表明であり、客観性の担保となるものは示されない。

eは近代以降の歴史を肯定的に捉えようと試みたものだが、「発展」の在り方を一方的に規定し、アイヌの独力による「発展」はできなかったと考えている点で、アイヌを無能力者に位置付けている。そのため、アイヌ自身による様々な「近代化」がありえた可能性を切り捨てていること、和人主導の土地・資源の配分とアイヌの生活への破壊的影響を伴う「近代化」が唯一の選択肢であったかのように見なし批判的な視点を欠いていること、そのような和人主導の「近代化」を恩恵のように捉えている点で問題である。また、その「発展」と呼ぶものと引き換えに、言葉や思想が奪われ、自身の属性や家族の歴史さえも明かせず、引き継ぐことができずにいる人々のことにも考えが及んでいない。アイヌの経験と、和人による「恩恵」は帳尻が合っているのか、それをどのようにはかるのか、筆者も答えを持ってはいないが、アイヌにとって抑圧は過去のことではなく、植民地経験は継続している。その現状を前にしての発言としては、あまりにも素朴で、楽観的であると言わざるを得ない。これもまた、アイヌに対する無知と無関心に根ざすものであり、このような認識の吐露は、アイヌにとっては理不尽で暴力的な言葉として経験されることが理解されるべきである。

fは、前項のfの変種である。こうした態度を取る者は、アフリカ系の人々など、アイヌ以外の容姿にも「なんか黒い彼」といった侮蔑的な発言をしがちであり、女性も含め日本社会における周縁化された人々への軽視・尊大な振る舞いが目立つ。

2-3. マイクロインバリデーション

a「開拓」や「フロンティア」を礼賛する諸言説
b植民地主義的研究を推進した教職員を礼賛する諸言説
cアイヌの土地・資源を一方的に接収したことに関し「じゃあ誰に許可を取ればよかったんだ」
d近代の政策への批判に対し「当時、他にどのような政策が取りえたのか」
eアイヌの存在・歴史に対する回避・無化
fアイヌ民族への人権侵害に対する軽視（対策の必要性を認めないこと）
g「私にはアイヌの友人がいる」

いずれも筆者が直接に経験したもの。a・bは、前項で見たような、北海道を無主地と見なし、アイヌ社会に対する破壊的な政策や行為をしてきたこと、それらを理論的に支えた研究・教育を無批判に肯定するもの。例えば、大学の特色や重要なキーワードとして、これらの言葉を前面に出すことは「北海道は無主地であった」と繰り返していることと同義である。発信者を限定せず、外向

きに発するのであるから、そこには「北海道大学の全教職員は『開拓』『フロンティア』を肯定している」というメッセージが含まれる（実際には、しばしば和人の学生からもこうした発信に疑問や違和感が表明されるなど、アイヌに限らずこれに共感できない者が学内にいる）。こうした発信はアイヌ民族の不在や経験の無化を前提として、大学の基本的な理念や、諸刊行物、博物館の展示などの形で表現されている。これらは、eとも深く関わっている。

eは、たとえば大学の出版物や、講義内容などあらゆる局面でアイヌ民族に触れない・存在が想定されていないことなどがこれに当たる。アイヌ不在の言説が常態化する理由として、意図的な場合とそうでない場合（アイヌ民族の歴史や存在が認識から抜けている場合）が考えられる。アイヌ民族の歴史・存在を無視・忌避し、あるいは限定的に触れることで、現在に続く大学の歴史から除外する試みは大学の創建期から不断に続いてきた[13]。

c、d、fは、アイヌの経験の軽視や無化に起因している。cは、近代の和人政府がアイヌ民族の同意を経ずに国民に統合し、土地・資源を接収したことに関する議論の中で、アイヌ民族全体を代表する制度や、国家など合意形成の場が無かったことを理由に「交渉の手段がなかったのだから強制収用はやむを得なかった」と居直るものである。当然ながら、アイヌ民族全体という単位でなく各地域や個人と個別に交渉をすることは可能であった。また、交渉ができなければ同意は不要だとする見解は論理とも呼べず、閉鎖的な場でしか発することができない暴言の類である。

dは、政策の評価をする際の前提としては理解可能だが、そのことと今日における権利の回復・補償とは別の問題として議論の可能性を示す必要がある。当時の和人社会の経済状況や不満の高まり、ロシアなどによる外圧といった事情で、和人政府の選択が狭められていたと見ることができるとしても、それはやはり和人の事情である。その点だけを強調すれば「やむを得ない事情があった」として収奪を正当化することにもなり、先住権回復を含む社会の改善に向けた議論や検討の一切を封じてしまうことにもつながる。

fは、個人による言動ではなく、環境に関するものである。2-1や3-1-2に挙げたような攻撃を防止するにあたり、その根拠となる規定などが用意されていない、教職員の問題意識を形成する機会が無い、など差別を抑制するインフラが用意されていない。

北海道大学では、ハラスメントを禁ずる規定が徐々に整えられているが、対策の中心はアカデミックハラスメントとセクシュアルハラスメントであり、それに加えてモラルハラスメントなどが想定されている。これは本学に限った事ではなく、多くの組織がアイヌ民族や外国人を構成員に含みつつも、レイシャルハラスメントへの対策を持っていない。この要因として、制度決定をする層がマジョリティで占められ、多様性を欠いているために、被害の存在や重大性を認識しにくいことが考えられる。金明秀は、組織内におけるレイシャルハラスメント解消の方策として、服務規定等

13　詳細は佐藤・北原・イヤス（2021）を参照。

においてそれを禁ずることが有効だと述べており、立命館大学でのガイドライン作成例を紹介している（金2018：131）。ただ、これはまだ新しい取り組みで、現状ではこのような規定を持つ組織はごく少数だと考えられる[14]。

gも、マイノリティに関連して発せられる言説の典型である。その意図は、マイノリティを友人に持つ自分は差別と無縁だ、ということの表明である。こうした言葉は、差別問題と自己を切断する目的で発せられるため、発話者は上に見たような差別解消の議論に参加する意思を持っていない、という姿勢表明ともなっている。形の上ではフレンドリーな発言であり、このように言ったとしても差別解消に貢献する姿勢があれば問題はない。ただ、筆者の経験上では、こうした言説は主に議論の回避や現状肯定と結びついている。

3. 大学におけるマイクロアグレッションの事例：学生によるケース

本節の事例は、筆者が2005年から、現在の本務先のほか、複数の大学で講義を行う中で触れたものである。各回の授業後に電子メールなどによって文字データで質問・感想の提出を求め、いくつかを選び個人情報を除いた上で翌週の講義で共有している。中には、意図的・非意図的にアイヌ民族や文化を貶めるものも含まれるため、問題点について解説するとともに、授業の組み立ての参考にしている。

事例の中にはマイクロアグレッションとまでは言えないもののその芽となるもの、学生自身が誤りに気付き反省や整理をしているものも含めた。傾向としては、教職員とほぼ同様だが、異質視の内でも特に非文字文化への言及、容姿への言及が突出して多い。その他内容が多岐にわたっているのは、対面ではなく課題提出の形を取っていることの影響も考えられる。他学生への批判や、アイヌを含む民族的他者への攻撃的な発言、距離感を欠いた記述などが見られるのは、ネットを経由して課題提出をするために、匿名性のあるオンライン空間と近い感覚になっているのかも知れない。

なお、のべ4000人を超える学生から提出された課題を元にしているが、年数の経ったものはデータの探索が容易でない場合もあり、全ての事例は網羅できていない。また、紙幅の関係で、掲載した事例は抽出数の半分以下となった。それでも事例が多いので、前記の3類型を更にいくつかの項目に分割して示す。記載内容に共通する特徴を抽出して小カテゴリー（異質視、存在否定、差別の

14 なお、公益財団法人アイヌ民族文化財団は、同財団規定に「ハラスメントの防止に関する取扱い要項」（令和2年10月16日施行）を設け、第5項目としてレイシャルハラスメントの禁止を盛り込んだ。ただ、パワーハラスメントやセクシュアルハラスメントについては多数の具体的な事例が示されているのに対し、レイシャルハラスメントに該当する事項については記述がとぼしく、さらに検討と取り組みの深化が求められる。その反面、「アイヌ民族でないことに対する差別的言動」など、いわゆる「マジョリティ差別」の禁止が謳われている点などは、やや唐突な印象がある。非アイヌをも不当な処遇から守るべきであるのは当然であるが、同財団の非アイヌ職員は、少数の琉球出身者や外国人を除いてほぼ和人であり、意思決定に関わるポジションにおける比率も和人が高い。そうした環境下で、実際に発生する事例や当事者のパワーバランスを考えた時に、まずアイヌの被害防止に向けた議論が深まっていくのが自然ではないのか。その進展もないまま、「和人だって差別されているのだ」とでもいうような文言が入れられていることは、議論のバランスから見て疑問を禁じ得ない。

正当化など）に分け、その現れ方によってマイクロアサルト、マイクロインサルト、マイクロインバリデーションに区分した。

3-1. マイクロアサルト

3-1-1. 異質視（野蛮視・劣等視）

a（クマ送りについて）やはりアイヌの信仰は理解できないし、したくもない。病気や老衰でなく殺害による霊送りは残酷に感じた。（2008）

b（クマ送りは）聞こえはいいが、実際には残酷。ひと思いに殺さず矢を刺したり、首を折ったりと酷いもの。女性たちの呪文めいた言葉が特に恐ろしい。自分がクマなら発狂する。アイヌの中に反対者はいなかったのか。ビデオでは婆さんが本当は殺しにくかったみたいな事を言っていたが..（2008）

c（仇討ちをテーマとした散文説話を鑑賞して）…「やられたらやり返す」というのがアイヌ文化なのか？日本や世界の一般的な童話（「悪人」「善人」の立ち位置が明確で「悪人は幸せにはなれない」というメッセージが含まれている）を聞いて育ったからか、親の仇を皆殺しにした後に主人公が幸せになるというストーリーが受け入れにくい。（2010）

bはクマの霊送りに対する反応。野生動物の視点を借りて主観を述べたもの。高齢者への無礼な言動が見られ、クマ送りの描写には誤解が含まれている。cについては、この民話の主たるテーマが「悪事を働いた者は報いを受ける」ことにある点を見誤っている。仇討ちをテーマとする物語は和人にも多く見られるが、当然ながらそれが全てのアイヌや和人の価値観と直結するわけではない。

3-1-2. 異質視（容姿に対して）

a ヒゲが醜いので剃ってほしい。（2014）

b 髭の件もそうだが自分勝手な意見で固めず、相手に対して迷惑をかけているなら言い訳せずに辞めたらどうか。（2014）

c なぜヒゲをのばしたり、髪をのばしたりしているのか？教壇に立つ方々はきっちりした人が多いので、気になる。（2010）

3例とも、筆者の容姿を問題視した主観的・攻撃的なコメント。他者の容姿について批判・批評や介入をすることの問題性、美醜やフォーマル・インフォーマルの感覚は文化ごとに大きく異なることを説明したが、反発が強くトラブルに発展した。当該学生の指導教員とも協議したが、同教員も問題を軽視していた。

3-2. マイクロインサルト

3-2-1. 異質視（野蛮視・劣等視）

以下の事例には、アイヌ文化に対する野蛮視・劣等視が顕著なものがある（表1も参照）。また、必ずしもネガティブな反応ではないが、日本文化との共通性が高い事項についても、はじめから全く異質なものとして捉え、自ら（和人）を現代、アイヌを過去に位置づけている傾向が見られる。

「アイヌ語にも文法があるのか」などの疑問は、知識の無さや未熟さから発せられたものとも考えられるが、一方で、日本語やいわゆる「先進国」の言語について同様の疑問が生じるかと言えば、それは考えにくく、軽視・野蛮視に起因すると見るべきではないか。また、aは、アイヌ語を動物の鳴き声に近いものと考えていたという例。1960年代のオーストラリアでは、入植者がアボリジニの言語を「豚の鳴き声に似た音を何種類か出すだけ」で言語ではないと見なししており、認識の類似が注目される（ドイッチャー2012：126）。技術が「低い・遅れている」とする見方が多いが、bなどは遅れではなく知能の低さという認識とも受け止められるもので、人種主義の影響を思わせる。

言語や文化の回復・権利保障を「保護」と表現するなど、見下しや優越意識も諸所に表れている。一方、そうしたバイアスを自覚し、克服しようとする姿勢もしばしば見られる。

a アイヌ語は擬音などでできた言語で適当に自分でも作れそうだと思っていたが、文法も存在していると知って驚いた。（2018）

b 樹液の利用はいつの時点で発生したのか。アイヌが自分でメープルシロップを作ったとは思えない。（2010）

c 採集文化を詳しく知らなかったので、貧しく、自分の社会と比べて劣っているという先入観を持っていると気付いた。アイヌの価値観は、過剰なまでに進化を求める現代にこそ必要ではないかと思う。（2020）

d シャーマンは、医療や科学が発達していなかった古代にとっては大切な存在だったのだろう。現代の目でシャーマニズムを見ると、科学や医療が発達した目からは胡散臭く思うが、現代から離れた地域にとっては大切な行事で否定するものではないと思う。（2020）

e 地鎮祭は日本書紀に記述がある。アイヌの建築儀式も本州のから伝わったものか。（2020）

f アイヌ民族という表現は、使ってよいか悩んだ。学術的にはすべての集団を民族と言いうるとしても、世間的には「民族」という表現には前近代的印象がある。（2021）

g 全体的に文明の進歩が遅いと感じた。本州に黒船が来て西洋化が進む中で、機械を一切使わず肉体や考え方、戦略などを進化させていて面白い。（2021）

h 狩猟文化や自然と生き物に対する畏敬の気持ちが縄文時代の文化と似ている。（2021）

i アイヌにもちゃんと神の存在があって、しっかりとしたひとつの民族、文化だ。（2021）

3-2-2. 異質視（非文字文化に対して）

以下の事例では、aやgなどに見るように文字に対する絶対視が顕著で、それがcのような非文字文化への野蛮視・劣等視として表れている（表1も参照）。アイヌ語がほぼ使用できなくなった今日の状況が、文字が無いためであるなど、アイヌ語に内在する要因によって引き起こされたと考えているものもある。

a 文字がないので、アイヌ語学習は難しいのか。それとも、文字がないので文法が比較的易しいのか。（2010）

b 文字が無い代わりに衣服の模様に意味があるのか？（2011）

c アイヌ民族の説話は教訓があるものであっても単純で、どこかいい加減で、即興で作ったもののようだ。物語の面白さを生み出す「深み」があまりない。文字がなく、口頭で語り継ぐため、複雑な話を作るのが難しいのだと思う。稀に、妙に話がしっかりして内容が深く、まとまっている話があるのは、一度日本語で文字に書き起こしたものを、アイヌ語で語り継いだのではないか。交易で和人と関わり日本語を話す・書くことができた人が作ったのだと思う。（2012）

d アイヌ語は記録として残ってないが、きっと言葉を覚える時には地面や布にメモぐらいしたのではないか。個人個人が音を独自に記号に表すことはできたはず。（2017）

e 文字がなかったからこそ、豊かな口承文学が生まれたのかとさえ思った。（2017）

f アイヌ語には文字がないので、文字言語よりも変化しやすく、方言が発達しやすい。（2018）

g 文字を持たない文化など存在するのか、という点が大きな疑問である。（2019）

h 古代の文字や口承文学では詳細にこだわらず、伝えたいことだけを伝えることが精一杯であったため、アイヌの神話に関わらず、話の飛躍や理解しがたいものが多い。（2019）

i 昔学んだ「文字があるところに文明が生まれる」という言葉を私は信じ込んでいた。（2021）

j 私も文字がない分、文化の継承は難しく記録も少ないという先入観を持っていた。明治期の植民地支配の思想が未だに無くなっていないようで恐怖を感じた。文化を残すために文字を学んだ人々がおり、筆録記録が残っていること、アイヌ語者を圧制した歴史があること、などについて私たちは考えていかなければならないし、他の人へ伝えて認識を変えなければならないと強く思う。（2021）

k この授業を受けると親に話した時に「アイヌ語には文字がない」と言われた。（2021）

3-2-3. 異質視（聖化）

聖化は、ある人々を過剰にロマン化し誉めそやす行為で、一見好意的に見えるものの、異質視・差別の一形態である。アイヌ民族の芸能を「芸能の原初の形態」などと評することがあるが、bもこれに近い（表3も参照）。同時代の文化を、自らの（人類の）過去に結び付けることは、好意的な語り口であったとしても「原始的」や「遅れたもの」とすることと裏表である。cは、サケが遡上する地域にはサケにまつわる信仰や儀礼が多いことに触れ、和人の事例も紹介した授業への感想で、先入観が論理やデータを排除していることを示す。

a アイヌの人たちは信仰心が強いからこそ食べ物を大切にする。日本は宗教もいろいろあって、信仰心が全然ないように思う。だからアイヌの人たちはすごいと思う。（2011）
b 音に乗せた語りを聞くことが出来て深く感動した。派手ではないけれど独特なリズムとメロディがよく耳に残り、どこか懐かしいような、神聖な雰囲気があって素晴らしい。（2020）
c 食物（の神）に感謝する儀式は、アイヌの方が日本よりも重視していることが分かった。サケやカジキを特別視するのは日本では見られない。（2020）
d 最近のハンターが最新機器を活用していると聞くと、がっかりしてしまう。他人には「伝統を壊すな」と求めてしまう理不尽さを自分に感じた。（2021）
e アイヌは動物と話せると聞いた。生活が自然と密接に結びついているからこそ、万物に神が宿っていると考えて感謝し、資源を大切にしながら生活していたのだと感じた。（2021）

3-2-4. 異質視（容姿に対して）

容姿への異質視の内でも、特に髭に関する言及が多い。学生と教員の距離が近いケースではこういう話題が出ることもあろうが、筆者が担当する授業は100〜200名が履修するもので、学生との1対1の交流はない。であるからこれらのコメントは、1度も会話をしたことのない、不特定多数から投げかけられたものである。

筆者は髭を話題にされることに必ずしも拒絶感は無いし、職務上文化についての説明（服喪のために剃る、人相を見る上での要素となる）の一環として、筆者自身が髭に言及することもある。その一方、マジョリティ教員との間には見られないであろう「なぜそうなのか」といった質問（あるいは勝手に納得しているもの）や、極端な距離の近さ、kのような侮辱的とも取れる気安さには問題を感じることがある。また、他のアイヌには、このような視線・コメント・質問を苦痛に感じる者もいるであろう。

a 先生は今日、髭を剃っていたが、新年になると剃るとかいう風習なのか?（2011）
b 今週は先生のお髭の変化に驚きを隠せないままレポートを書いている。（2012）

e 先生はお髭をシャンプーとリンスで洗うのか？それとも石けんか？？（2012）

f 先生の髭には強い誇りと信念があるということを痛感した。（2012）

i 質問だが、先生はどうして髭を生やしているのか？（2012）

k 夏になると、ヒゲの中にハエとか入って来ないか？（2012）

n やはり一番最初に驚いたのは先生の風貌だ。先生のその立派なお髭にはやはりこだわりがあるのか。（2013）

p 講義を重ねるごとに髭が着実に伸びていると感じ、最終日までにどこまで伸びるか楽しみだ。（2015）

3-3. マイクロインバリデーション

3-3-1. 存在否定・歴史否定（現状肯定）

アイヌ民族としてアイデンティティを持つ者の存在・経験を無化する表現や、アイヌ民族の歴史を「13世紀～近世まで」と短く見積もること、現在は「純血のアイヌはいない」といった言説は、学生からもしばしば発せられる。これらは、他者のありのままの存在や経験を見落とすことにつながっている。アイヌが同時代に暮らしているという意識が欠如することで、民族間の不均衡や葛藤をも見えにくくなり、現状に疑問を抱く契機がなくなる。アイヌ民族にとっては、そこにいながらにして「見えないことにされる」経験となる。

ただ、歴史認識については、学習者の問題と言うよりは、研究上の用語の設定や教材の作り方によって錯誤が生じる面も大きいように思われる。例えばaは国籍と民族性の違いに対する理解不足、cは考古学上の用語に起因する混乱である

a（「アイヌは今もいるか？」という質問にどう回答するか、という設問への答えとして）アイヌはいない。江戸の頃には存在したが、明治時代に同化政策として「日本国民」にしたので、民族としてのアイヌ人は存在しない。（2015）

b（同前）今はアイヌ人という民族は存在しないことになっている。（2015）

c 日本史で、13世紀までは擦文文化でそれ以降がアイヌ文化だと習った。しかし、「アイヌ民族」自体はアイヌ文化という区分に移行する前に存在していたということか？（2020）

3-3-2. 過去の存在（現状肯定）

前項と同じく、アイヌ民族の存在を過去のものとしたり、あるいはdのように和人の加害は過去のことであると見なしたりするコメントは多い。それによって、権利侵害が放置されたままの現状に疑問を抱く機会を失うか、あるいはbのように議論を切り捨ててしまう結果となる。aのように聖化などを含むコメントもあれば、eのようにアイヌを古めかしく異質な存在と見ているコメントもある。

a 授業で見た採集の映像には、私たちが失ってしまったものがあると思った。私はあれを見ると言いようのない悲しい気持ちになる。きっとそれは、自分達がもうあの生活に溶け込み・馴染むことは出来ないこと、そして、誤解を恐れずに言うならば、あれ自身失われてしまった生活であり文化であることを感じたからだと思う。（2011）

b アイヌとの間の不均衡は問題だが、時間が経ってしまったので無くすのは難しい。（2020）

c 高校の日本史でアイヌについては全く知識が得られず、昔の存在だと感じていた。（2021）

d 明治時代にアイヌは同化政策等によって抑圧されたという過去を持つ。（2021）

e アイヌの宗教と現代の我々の宗教観が似ていることが意外だ。（2021）

3-3-3. 「マジョリティ差別」（現状肯定）

講義の中で、マイノリティの目線でマジョリティを捉え返すことや、様々な格差の認識や是正の取り組みを紹介すると、それらを「優遇」と捉え、マジョリティに対する制限や何らかの剥奪として受け止める反応がある。例えば、アイヌ語によってつけられた地名は、政府や行政によって改変や抹消が行われてきたことから、これ以上の改変を抑止し、本来の地名を回復するといった要望がある。これを、dやe、hは、和人住民への侵害と見なしている。bは、マイノリティに「わきまえる」ことを求めるもので、処遇の差異はあって当然とする考えが伺える。cは、入植の歴史を理解していない（説明は受けている）。これは教科書などが和人中心の記述になっていることを紹介したことへの反応で、和人の利便性のためにアイヌ視点の記述をしないことを「中立」と表現している。gやjは、マイノリティが際限なく過大な要求を続けているとする認識を示す。kは、マジョリティとは異なるアイデンティティを承認すること自体を問題視する意見もある。これらの多くは、図1に示した状況を理解していないことによる。マイノリティの要望は基本的人権の保障を求めるものであり、それさえも実際に承認されることは稀だが、要望が出たという事実だけで剥奪感や苛立ちなどの反応が起こる。客観的に見れば、マジョリティの一方的な占有に対し、譲り合いを求められているのだが、そうした提案が不当な剥奪として理解される。

そうした剥奪感は、マジョリティが意識せずに持つ特権性への理解が欠けていることによって起こり、結果として現状を変更することへの抵抗として表出する。これらは、マイノリティにとっては、現状を変えようとする動きへの抑圧・敵意として伝わる。

a マイノリティへの配慮は必要だが、全ての人に配慮すれば表現が狭められてしまう。（2015）

b マイノリティも自分をマイノリティと自覚し、過剰な主張をしないことが大切（2019）

c 様々な民族のことを知るべきなのは分かるが、ここはアイヌ民族の国ではなく日本人の国なので日本中心になるのは仕方ない。もちろんアイヌ民族に対しる差別はよくないが、その教育を変えることは不可能であり、それをする必要もない。アイヌの視点に立った教科書記述などは

和人にとって分かりにくい。両方の視点を持ってほしい（2019）

d どこでも多数派・少数派は生まれることは避けられず、多数派に少数派の文化や言語を習得するよう強制することには同化政策と同じ問題があり、悩ましい。（2020）

e 地名を昔のものに戻すということはアイヌには喜ばしいかもしれないが、カタカナ、アルファベット表記になり、異文化の感じがして嫌がる人もいるのではないか。（2020）

f 今北海道にいる人は生まれた時から漢字の地名に親しんでいるので、両方の地名を尊重していく方法が考えられるべきだと思った。（2020）

g 男女雇用機会均等法以前以後のフェミニストを見ていて、”どこまで格差や差別がなくなれば納得するか”という落としどころを考えなければならないと感じた。完全にニュートラルな状態が理想的だが、現実的に難しい。（2020）

h 先住民がその土地の地名を継続的に使用する権利を有することは、十分承知した。しかし、現在の地名を元の地名に戻すことがあったとすると、今度は現在の住民の気持ちを無視する事態に陥る。過去の過ちの対価を罪のない現在の住民たちが払うのはしっくりこない。しかし同時に、過去に人権侵害によって手に入れた土地と地名を使用しながら、自分の気持ちを主張するのもどこか虫のいい話に聞こえる。（2020）

i 優遇措置をとることで和人とアイヌなど異民族との区別が強調されバランスが難しいと思った。差異を強調し優劣をつけることは良いとは言えないが、正直それで楽をすることもあると思う。力が強い男性に対し女性は優しく、男性に比べれば人前で泣いても受け入れられやすいなど。（2020）

j 「アファーマティブアクション」がいき過ぎて、かえって白人や男性への「逆差別」となってしまうと習った。私は今回の授業の中でいき過ぎた格差是正政策を抑え、差別をしていた人もされていた人も平等に生活できるようにしなければならないと思った。（2021）

k 和人とは異なる人々に対して普段から意識することは重要かもしれないが現在の日本での外国人のような扱いになってしまい生活しにくくなってしまいそうだと思った。（2021）

3-3-4. 差別・支配の正当化（現状肯定）

差別に正当な理由があった、当時はそれで正しいと考えていた、合理的に考えれば支配をしたとしても仕方がない等の論理や、あるいは第3者的視点に立ち「どちらの主張にも問題がある」とする論理で、現状を変革する必要性から目をそらす例がある。

a～cは国家への一方的な統合や同化政策が、他者の自己決定や言語権等を否定していることを不問にし、批判を不当なものと見なしている。dやe、fは、アイヌの自己決定やアイデンティティの維持を、アイヌ側の「非」だとしている。iは、サケの人工ふ化事業によって、アイヌが和人から恩恵を受けていると考えている（サケの資源確保や増加における人工ふ化・放流の効果には疑問も

呈されている）。kは、他国でのマイノリティ抑圧に話題を転じて論点をずらし、それらに比べれば日本の行為は軽いか、過去のものとして不問にしている。gやnは、性悪説や弱肉強食の論理、mは国防の論理により暴力や支配を「仕方のないこと」とする。

これらに共通するのは、他者との間に起こっている問題を、自己の視点や論理のみで解釈し、一方的に結論づける姿勢である。

a アイヌの人々は現在日本国民であることに不満があるのだろうか?どこを目指してアイヌの復興運動をしているのかがいまいちわからない。（2010）

b 言語がなくなるというのは悲しいが、時代の流れ上致し方ない。（2010）

c 大和民族としても、自らの文化、言語、国家自体を守っていく必要があり国力を増強する必要があったと考えられる。大和民族による政治的支配や、経済的支配はそういった方法の側面の一つだったとは考えられないか？（アイヌ民族への政治的、経済的支配や差別を生む社会的風潮があったということを肯定的にとらえているわけではない）。日本の韓国併合と、欧米が行った植民地支配はかなり性質の異なるもので、日本は、朝鮮では教育に力をいれ学校を建設し、識字率を激増させ、人口も倍増、道路や鉄道や水道などのインフラをも整備した。（2010）

d 和人のアイヌに対する取り込みはアイヌを騙したり和人が悪かったかの様に書かれていることが多いが、本当に一方的に和人が悪かったのか？アイヌが和人の交渉に応じない等アイヌに非は一切なかったのか。（2010）

e 日本の民族主義に対して、少数民族の権利を主張する運動もまた民族主義ではないか。アイヌの権利は最大限尊重すべきだと考えるが、一方で民族主義によって民族主義を克服することは出来ないのではないか。（2010）

f （差別解消の取り組みに関する報道について）人種間でいざこざがあるようなイメージをニュースが対立を際立たせたり、助長しているように思う。報道する内容、伝え方に違和感が残った。（2020）

g 西欧諸国は武力を行使して相手の文明に対する優位性を得、敗北した少数民族は搾取されているが、アッバース１世のホルムズ島奪還等、西欧に抗った民族もいる。自分の考えに嫌悪感があるが、はっきり言って、狩猟・採集文化は西欧的工業文化に飲み込まれてしまうのだから、工業的文化を得、武器を手に取り抗う道もあったのではないか。（2020）

h 本州からの支配があったからこそ北海道が発展した部分もあったと思うので、そこは互いに共存を模索できないか。（2020）

i 報道で、サケの漁業権をアイヌ民族に対して拡大させるべきかどうかという議論を目にしたことがある。しかし、和人の持ち込んだ養殖技術が漁獲量に貢献している面もあるため、我々マ

ジョリティがどの程度歩み寄り、漁業権を拡大するのか難しい面があると思う。（2020）

j 狩猟の禁止は、日本の自然や国民の安全を守るために仕方のないことかもしれない。しかし、アイヌの狩猟の技術が失われれば我々は完全に今の文明に頼らないと生きていけなくなってしまう。こういったことからも先住民の文化を守る必要があると感じた。（2021）

k 最近よく聞く問題として、ウイグル族の人々に対して、中国が国家ぐるみで中国語の使用や宗教の改宗を強いている状況があるということを聞いた。日本政府が明治期にアイヌに対して行った、ある種の同化政策のようなことが、ウイグル族に限らず世界ではたくさんある。（2021）

l マジョリティ言語を話せると便利なので、マイノリティ言語が絶滅してしまうのはある程度予測できることだと思う。この問題は誰が悪いとか、誰の責任だとかは無くて、仕方のないことだ。グローバル化が悪いことではない。（2021）

m異なる言語を用いる民族がいることを曲解して「日本語以外の言語を使う民族が住んでいるのだからそこは日本の領土ではない。本当はうちの領土だ。」という主張を他国がし、戦争や内政干渉が起こる可能性があると考えると、外交・国防という観点からは一概に「一国一言語」を否定できない。（2021）

n 自分の文化的アイデンティティを保ちつつもマジョリティのやり方にも対応できるようにすることが、社会を上手く生きていく方法なのではないか。（2021）

3-3-5. マジョリティ中心的感覚（無知・無理解・当事者意識の欠如）

ここに挙げたものは、自文化中心主義や優越意識（a、b、j、k）、他者への無知・無関心（c、d、h）などが表れたものを含む。iは無知・無関心から起こる排除への批判に対し「意図したものではない」として反論したもの、lとmは説明を受けても当事者意識を持てずにいるもので、結果として排除の構造を軽視・温存することににつながる姿勢が表れている。

自文化中心主義は他者に向けたものではないし、無知や無関心は攻撃的なものとは見えないため、あまり問題視されることがない。しかし、金友子（2016）や、筆者の知人からの聞き取りにおいても、あからさまな差別以上に無関心・無理解が最も大きなダメージを与えるという声が聞かれる。マジョリティが持つこうした感覚は、マイノリティにとっては無遠慮な言動や無視として受け止められ、間接的に尊厳を削り取る。マイノリティはマジョリティの発想や振る舞いを深く理解し、それに合わせずには生活ができないが、マジョリティはマイノリティのことを知らずとも生活の上で全く支障がない。マイノリティに対する、屈託のなさは、圧倒的な力で相手を自分たちの生活に巻き込みながら、そのことに無自覚でいることの表れである。その上で発せられる「素朴な疑問」といったものは、自らを問うことなく一方的に相手に説明を求めることでもある。ここには、抑圧の否認が二重になされており、それが問われた者を傷つける。これは、自己や他者について学

び考える機会が不足していることによるものであり、学びによって学生自身がこのことに思い当たり、当惑している例もある。こうした反応を見れば、より早い時期から多様性を知り、他者を尊重する教育を実施することで、こうした齟齬のかなりの部分が解消可能であろうと思われる。

a GDPの指標でみれば、先進国の産業社会は優れており、狩猟採集民族は貧しい。（2019）
b アイヌの人々が狩猟採集で何不自由なく満足に生きられたとは思わない。客観的に比較して、現代と比べて経済的に豊かではない。今では車で長距離を移動でき、スーパーマーケットにいけば食べ物も手に入る時代である。衛生に関しても、医療も環境も昔のアイヌ文化と比べたら、今のほうが断然いい。（2020）
c アイヌ民族の日本国内での立場について、受講以前は、「十分に尊重されているし、法律をわざわざ作る必要があったのだろうか？」と思っていた（2020）
d アイヌは漁業のイメージが強く、まさか農耕を行っているとは思っていなかった。（2020）
e 何をもって自分は日本人、和人なのかと聞かれたときに、正直日本語を話す、日本に住んでいるくらいしか思いつきませんでしたが、自分は絶対に日本人だなという根拠のない確信だけはありました。（2020）
f 北海道大学の大学情報を調べたとき、開拓などの言葉が使われていることに驚いた記憶がある。自分がそのことに疑問を持つことができたのは良かったと思うが、悪意なく使われる言葉も背景の理解が求められると思った。（2020）
g 狩猟以外についてもそうだが、アイヌの文化として聞いた習慣が実は和人にもあるものだったということも多く、自分の民族の歴史を詳しく知らないのは問題だと思った。（2020）
h「日本は単一多民族国家であるから内戦や差別がなく平和だ。」という内容をメディアで見たことがあり、その時はそれで納得していた（2021）
i「北海道には歴史がない」という発言の差別性が説明されたが、北海道は他に比べて和人が作った歴史が浅いということでこの差別の言い回しが生まれたのかなと考えた。私は、北海道出身だが、一人の道民の立場としては、比較してのことであるので、これが差別と感じるかは微妙だと思った。（2021）
j よく「日本語は世界一難しい」という言い方がされたりするが、日本人はそう信じることで優越感を得ている、という話を思い出した。（2021）
k 私は無意識にマイノリティがマジョリティに合わせるべきだと感じていた。（2021）
l 自分はアイヌのことは距離をとって見守ることにする。（2021）
m差別を受けている状態にあったアイヌの女性たちは、自分たちが差別を受けていると認識していたのか？差別を受けても、そのことを普通だと思っている場合、我々第三者は差別があると声を上げ、問題を浮き彫りにするべきなのか？（2021）

4. 対策

前節の事例では、アイヌ民族を始めとする文化的他者や他のマイノリティに対するネガティブな視線と、それと連動した差別・暴力の肯定・正当化や、居直りのような見解が複数見られた。これらの内容が、教職員の言説とかなり共通している点に注目しなければならないだろう。つまり、大学においてもあらゆる場所・層で、セクシズムや異性愛主義とともに、レイシズムも確かに存在していると考えなければならないようだ。スー（2020）は、マイクロアグレッションの克服を論じる中で、事後的対処によって被害を軽減することと、事前の防止策に触れている。次に、それぞれについて見ていくことにする。

4-1. 被害の軽減

マイクロアグレッションが強いストレスを引き起こすのは、その出来事や不快感の原因が曖昧で不確かではっきりしないために、知覚も対処も困難だからである。また、このために、周囲からの共感や支援を得にくいことも大きな問題である。したがって、この行為にマイクロアグレッションという名前を与えることそのものが、行為と影響を目に見えるものにし、それと距離をとって対策を講じる一歩になる。現象や問題点を的確に捉えることで、それが起こる状況の予測や対処も可能になるからである（スー2020：184）。また、周囲の人々による理解や心理的サポートにも、被害からの回復の点で大きな効果が期待できる。周囲がマイクロアグレッションを理解することで、被害者を非難せず、的確にサポートをすることが可能になる。したがって、組織の人々がマイクロアグレッションについて理解することで、被害者となることも加害者となることも避けられる可能性が高まるし、防災訓練のように問題が発生したときに備えて対処法を知っておくことも重要である。

佐藤（2018）は、差別を差別だと認識し明言することで、差別の影響力が減退することを「ワクチン」に例えている。差別に近寄らないのではなく、差別についての知識という毒を取り入れることで、抗原が生まれる。これと同じように、マイクロアグレッションに気付き、それを指摘し、不当性を明るみ出すワクチンが共有されれば、曖昧さ、不確かさといったマイクロアグレッションの毒性を弱めることもできるだろう。また、自尊心や楽観主義、結束、強固なアイデンティティも、人々を守る内的な資源になるという（スー2020：186）。これらは、個人とその属性に対する蔑視に、直接対抗するものになるからだ。アイヌ民族について言えば、当事者の視点によるアイヌ史・アイヌ文化研究により、過去に与えられた不当な評価を改めるとともに、その成果を教育に反映していくことが求められる[15]。

15　これは、非アイヌによる研究が不要だという主張ではない。複数の目で見ることにより、研究も評価も適正化することが期待できる。当事者研究の必要を論じるとき、和人研究者からは「和人を排除しようというのか」という反応があるが、現状を見れば博物館や大学でアイヌ研究に従事する者はほぼ和人しかない。3-3-3の事例と同じく、抑圧的な現状への認識が欠けているために、これを是正しようとする提案に対して「自分たちが抑圧されている」とする反応である。

4-2. 被害の防止

マイクロアグレッションを抑止する方法としては、個人への介入、制度・組織への介入、社会全体への介入という長期的なアプローチが挙げられている（スー2020：294）。これらは相互に連関しているが、個人が持つマイノリティへの偏見、先入観、ステレオタイプを認識し、解体することが最も基礎的な取り組みとなる。そのためには、これらのネガティブな要素が、人間の自然な心理的反応として誰の心にも必ず存在することを認めることが重要である。そのことを受け入れることで、自身の内面にある偏見等に向き合い、それを明かすことで変革を始めることができる。より具体的な方法としては、自身が他者に対して持っているイメージや期待する役割を点検し、問い直すことなどが挙げられている。

制度・組織へのアプローチでは、特に差別や敵対的環境を許さないという理念を明文化し、制度に反映することが重要である。また、構成員に対する教育と訓練を提供すること、特定の立場が有利になっていないか、組織・制度をモニターすることも有効だという。

社会・文化は、人々を条件づけるもので、これを変えるには、大きな力を要する。この変化も個人へのアプローチの延長にあり、文化を伝える教育、メディア、制度の内容、過程を検証して変革することが求められる。

おわりに

本稿では、2005年以降の事例を扱ったが、過去に遡れば、戦前からの、教員による差別的言動や、不適切な資料収集などの研究における差別的取り扱い、差別講義事件などがあり、これらを誘発・許容するような、アイヌ民族（および他のマイノリティ）に対する敵対的な環境は、どの時期にも存在してきたと推測できる。本学が、歴史の語り継ぎを行い、より良い未来を模索しようとする時、アイヌに対するこうした処遇を忘れることはできない。また、こうした状況は、明確な対策を取っていない他の大学や、行政機関、企業など民間の組織にも、基本的に共通して存在していると予想される。それぞれの組織があり方を見直し、社会全体が差別解消に向けた歩みを進める上で、マイクロアグレッションの研究は大いに効果を持つと考えられる。

なお、佐藤（2018）は、偏見理論における、偏見が予め個人に内在するという前提を批判する興味深い議論を行っている。本稿ではこの議論を十分に咀嚼し反映することができなかった。ただ、佐藤も偏見の存在を完全に否定しているわけではない。本稿で取り上げた事例以外にも、偏見が親族から学生に伝えられるケースが散見し、また学生と教職員との認識の類似を見れば、学内の環境を通じて学生が偏見を内面化していくケースもあると予想される。

また、池上（2014）は、従来の差別研究を概観し、差別の正当化は、差別が不当であると強く認識することの反動として引き起こされるという見解など興味深い学説を多数紹介している。これらについては、稿を改めて検討したい。

3-2-1. 異質視（野蛮視・劣等視）
・「民族」という言葉には冷たさ、無機質さを感じるので使用には躊躇いがある。（2020）
・シャーマンと聞くと現代では胡散臭く感じるが、医療や技術が進んでいない昔の人々にとっては大切な存在だったと感じた。（2020）
・消防法や衛生面などの本州の基準で儀式や住居の様式を変えなければならないことはすごく可哀想に感じ、アイヌを尊重すべき。（2020）
・狩猟・採集文化を持つ人々を無意識のうちに見下し、彼らの生活を見てかわいそうだと思うことは自分にも当てはまる。（2021）
・アイヌ語に文法はあるか？（2021）
・世界の公用語である英語はともかくとして、中国語や朝鮮語など、一外国語に過ぎない言語が、公共空間でアイヌ語より優先して書かれている状況は、おかしいと思う。（2021）
・アイヌの保護を考える過程が、ＬＧＢＴなどマイノリティの承認を考える過程と全く同じであると感じた。（2021）
・本土と比べて進歩が遅れているとは感じていたが、やはり文化の違いに驚いた。（2021）
・シャクシャインの戦いで既にアイヌ側でも銃が使われていたことに驚いた。当時の先進技術を持った和人対そうでない相対的に武力で劣るアイヌ民族の戦いというイメージを持っていたが、これも無知からくる偏見だったのかもしれないと思った。（2021）
・アイヌ語の文法を知り、ちゃんとした言語なんだと思った。（2021）
・アイヌの音楽は歌うことに重点が置かれ、現代の私たちの音楽は聴くことに重点が置かれている。（2021）
3-2-2. 異質視（非文字文化に対して）
・アイヌ語に複雑な文法があることに驚いた。文字をもたないなら、人称変化などの文法が存在することは、コミュニケーションをとるうえで障害にさえなるのでは。（2012）
・（現在のアイヌはどのような言葉を話しているかという質問に対し）文字を持たないので記録が残らず、アイヌ語はその文化とともに消えていってしまった。（2014）
・アイヌは物語や音楽で後世に重要なメッセージで伝えることが十分に出来たため、非文字文化が展開されたのではないか。（2017）
・文字を持たず、絶対数も減っているので、文化の消滅は現在も急速に進んでいるのではないか。（2018）
・アイヌ語は、語学として文献に残していったりはあまりされていないのか、日常でほとんど使われていないのはそのせいなのか。（2018）
・文字がないのに日本語で表されて残っていることが興味深い。日本語を介してどのように受け継がれたのか気になる。（2019）
・音で物語を伝える前提があるからこそ、sakeheは生まれたはずで、文字がないからこそ生まれた文化だと感じ、文字のない文化の中での文学にさらに惹かれた。（2019）
・文献資料は比較的改ざんが難しく、それを記した民族が滅びたとしても残るが、口承文化は時を経るとともに変化しやすく、外部からの改ざんが可能である。（2020）
・庶民の教育が整備され一般人が文字を扱うようになったのはつい最近のことだと知っていたし、母語も初めは音から覚えたのに、文字がないと聞いて驚いていた。文字の存在を普遍的なもの、当たり前のものだと思い込んでいた。やはり無意識に何かを自明視することで差別を生む恐怖を感じる。（2020）
・歴史を学ぶ中で、文字の成立・使用と文明の発達は強く結びついており、文字があるからこそ高度な文明を築けたと考えていたが、これも一種の隠れたカリキュラムなのかと思う。（2020）
・歴史の授業でアイヌの人々は文字を持たないから交易でケチられた、と習った。（2021）

・アイヌ語にも文字の記録はたくさんあるようですが、それは最近のことで、昔のことに関する記述はやはり乏しいのではないかと思います。例えば、1000年前に起こった大地震による被害の詳細や大流行した疫病についての記録はあまりないのではありませんか？アイヌは口承で伝えていたと聞きますが、それだとだんだん内容が不正確になってくると思います。（2021）
・（行政による「アイヌ語には文字がないためアイヌ語の記録が乏しい」という言説の問題点に関して）たとえ和人によるアイヌへの植民地的施策がなかったとしても和語に関心のあるアイヌにしか資料は残せなかったであろう。和語を輸入する必要性が強くあるとも思えないし、仮に文字が浸透しても、和人と関わる近世より大きくさかのぼった史実に関する資料が極端に乏しくなるのは明白であり、その根本原因は文字がないことにあるのではないかと思う。ただ、近世以降の資料不足に関しては責任転嫁であるとも思う。（2021）
・私はずっと札幌に住んでいたので昔からアイヌの人たちは文字を持たないので教育的に遅れていて記録に乏しいという印象があったしそのように教えてもらった記憶がある。だが、実際はアイヌの人でも研究者として研究をしていたり、日本語を覚えて学校を建てるなど全然教育的に遅れていないことを知り、未だにアイヌの人たちに対する偏見が存在すると感じた。（2021）
・アイヌ語は文字がないから記録が少なくて伝承されにくいとされるが、日本語の方言は書き言葉に使われなくとも受け継がれているから、その考え方は改めておかしいと思った。文化や言葉はそれを使う人がいれば少数だとしても受け継がれると思う。（2021）
3-2-3. 異質視（聖化）
・今一度、アイヌの人々のように持続可能な自然の利用法を考えるべきだと思った。（2011）
・「アイヌ民族は、宗教深い」というのは、間違っているのか？やはり様々な神に対して、和人よりははるかに時間をかけて祈っていると思うし、一人ひとりに神がついていると考えている点から、神を身近に捉え、生活と宗教の癒着度が高かったといえる分、宗教深いとは言えないのか？（2019）
・快適さが進んだ現代こそ、アイヌ文化への理解を深め、当たり前に感じているものにも感謝する気持ちを思い出すべき。（2020）
・今日の先住民族は、現代の科学技術の発達に伴って、車やボートで狩りをするようになったので、訓練や知識の伝達がおろそかになっているのではないかと感じもした。（2021）
・アイヌは、人間以外のものに対する畏敬の念や感謝を強く抱く。普段何不自由なく生活していると、忘れてしまいそうになる。（2021）
3-2-4. 異質視（容姿に対して）
・どうしても聞きたいのだが、先生が長年のばしていた髭を剃ったことに衝撃をうけている。何が先生を突き動かしたのか？気がかりで仕方ない。（2012）
・髪と髭はいつ、どこで切ったのか？また、もう一度髭を伸ばす予定か？（2012）
・先生はアイヌの血が流れているから髭が伸びやすいのか？それとも、男の人なら伸びるものか？（2012）
・フサフサの髭は手入れをしているのか？（2012）
・先生がアイヌだというのは初耳だが、おヒゲからそんな気がしていた。（アイヌ男性のヒゲは確かにかっこいい）（2012）
・先生の髭がまた立派になり始めた。これはアイヌの格好良さという点で伸ばし始めたのか？それとも論文が忙しくて伸びたのか？（2013）
・さて、質問と言っていいものかよくわからないが、なぜあの立派な髭を剃られてしまったのか？先生が教室に入ってきたときに若干の違和感を感じ、しばらくして気が付いた。個人的には先生の威厳ある髭を気に入っていたため少しばかり寂しい。そして、これからの季節髭を剃ってしまって寒くないか？（2013）
・とても、先生の髭が好きだ。このまま維持して欲しい。（2014）
・例えば初めて会った人でも、「あ、この人アイヌ人だ」と分かるものか？（やはり髭がわかり易いのか）（2018）
・教員のメールアドレス名（通常は氏名等を登録するところ）を「髭」と登録。登録名が受信者にも表示されると気付かなかった（2018）

・大変失礼だが、先生のヒゲはボディーソープとシャンプーと洗顔料、どれで洗っているのか？（2018）
・先生の逞しいお髭はアイヌ民族としての誇りを忘れない為に伸ばしているのか？それとも、何か深い理由があるのか？是非教えてほしい！（2019）
3-3-3.　「マジョリティ差別」（現状肯定）
・マイノリティは自意識過剰なだけ（2019）
・確かに北海道に歴史がないという言葉などはよくないし訂正していくべきだと思いますが、過剰に反応し過ぎて自分の方から溝を作るのはよくないかなと思いました。（2019）
・マイノリティだけでなくマジョリティに配慮が必要（2019）
・和人中心の記述はよくないと言われても、文章を書くときは視点を統一したほうがわかりやすいし、和人視点で書くのが当然（2019）
・「アイヌ人」に対して「和人」と呼ぶことに違和感がある。これは当然の区別で失礼にはあたらないのだろうか。（2018）
・右翼の方たちが「在日朝鮮人は補助金をもらいすぎだ」と主張するのを見て、それには一理あると思っていたが、実際に在日朝鮮人がどの程度の不利益を被っているのか、多数派である日本人としてしっかり知る必要があると感じた。（2020）
・フェミニズムに対してマイノリティが優遇されているのではないかと思ったことがある。男女間の格差や対策を正確に知らずに考えていたことに気づいた。アイヌ民族と和人の格差をきっかけにして、自分の身の回りに存在する格差とその対策を正しく認識しようと思う。（2020）
3-3-4.　差別・支配の正当化（現状肯定）
・ロシアが北方領土を実効支配するに至る過程を考えると、日本側が返還を要求するのは当然の主張であると考える（2010）
・アイヌの昔の暮らしでも、春と夏は女の季節、秋と冬は男の季節といわれていたように、世の中には体格的・精神的に女性にしかできないこと、男性にしかできないことがある。現代社会には、ちょっと違うだけですぐに差別だとしてきれいごとを並べる人が多い。悪いものととらえず、その人々にしかできないことを探していくことが重要。（2020）
・自分の祖先の犯した過ちを無視するようだが、アイヌに限らず、近代において自らの文化を大きく転換した（させられた）民族は、以前の生活に何かしら不満があったなど「近代的」なライフスタイルが入り込む余地があったのかもしれない。そうでないとすれば、和人がアイヌ民族や琉球民族に行ってきた同化政策や欧米列強が植民地に対して行ってきた政策は、たとえ過去のものであっても、現代を生きる人々、とりわけかつて他者の文化をないがしろにし、文化を失うことに認識の無い私のような人々が学び、加害者とも被害者ともならないよう策を練るべきだ。（2020）
・北海道はロシアの南下政策対策のために、明治政府によって同化政策が実施されたという歴史的背景もあるように半ば強引に日本国への併合が行われたため、その態度はアイヌ民族に対する配慮を欠いたようなものであり、差別的であったと思われる。少数民族だからといって言語権が否定されるのは間違っているが、かといってその言語権を尊重するためにたとえばアイヌ語を必修とすることは不可能であるため折り合いが大事だ。現状では多数派に従うことは仕方のないことなのではないか。（2021）
・日本も西洋の侵略におびえていた点を考慮すると、アイヌ民族に対する和人の行動は和人に百パーセント非があるとは言い難いが、自分たちがされたくないことをアイヌ人に行ってしまったという点では和人にも大きな非がある。（2021）
・欧米諸国は、先住民族の尊重を掲げ、中国ではウイグル自治区の人々への人権侵害、ミャンマーではロヒンギャに対する差別が報道されているが、日本ではどちらでもなく先住民族が〝透明化〟している気がしました。アイヌ民族や琉球王国が国際社会から比較的注目されない傾向にあるのもそれによるのかと思う。（2021）
・文化による偏見を無くそうという風潮があるが、国が国として存在する以上避けられないことだ。（2021）
・非人道的な支配は気持ちよくはないが、弱者が強者を支配するのはある意味では生物の大原則であり、難しい問題だと思った。（2021）
3-3-5.　マジョリティ中心的感覚（無知・無理解・当事者意識の欠如）
・民族紛争や差別は外国のことだと思っていて、国内のことに無関心だった。（2020）

・海外の人やいろんな民族が身の回りにいると理解していながら、第一言語で公共機関が利用できない人がいて異言語を強制されていること、当たり前に自言語を使えることが特別だと意識してこなかった。（2020）
・今日本国内にアイヌ語のネイティブの方（日本語よりもアイヌ語のほうが扱いやすい方）はどれくらいいるのでしょうか。（2020）
・講義で、自分の地元（空知太）にも確かにアイヌの文化があったのだと確認できた。しかし、私の町ではアイヌ文化の存在を思わせるようなものは見たことがない。北海道にあった文化がこのように見られなくなっているという事実に改めて気づき、何とも言えない気持ちになった（2020）
・よく会話の中で北海道は歴史がないから‥、浅いから‥と言うことが確かにあるが、それは和人にとっては歴史が浅いだけであって、アイヌの人々が歩んできた歴史は自然になかったかのようにされている現実に、あまり違和感を抱いていなかったことは恐ろしいことだと感じた。（2020）
・「コロンブスがアメリカ大陸を発見した」という言葉には違和感があったが、「北海道を開拓した」という言葉には これまで違和感がなかった。他国の侵略には目を向けても、知らずに自国の侵略から目を背けていた。（2020）
・私は道外出身のため、北海道に来たらアイヌ語が日常で使われているところを見ることが多いのかなと思っていた。でも、いざ北海道に来ても日常でアイヌ語に触れることは今のところない。（2020）
・（「標準語」や言語の維持を捉え直す一環として、学生が出身地の言葉で質問・感想を書いたことについて）方言で書かれた授業感想を見ていると、標準語で書かれたものに比べてだらしないと思ってしまう。また、書いた方も書きにくかったという意見が多い。日本語は標準語で書くものという意識が自分たちに根付いていることがわかった。一方で、音声の方言についてはある程度認められていると感じる。これらの出来事を振り返ると、やはり文字は格式あるもの、音声はラフなものと思っていたと感じた。（2021）
・アイヌの人々の戸籍にはアイヌの名は使えるのか？（2021）
・漢字が中国語から来たのは知っていたが、ひらがなもそこに由来するとは驚いた。（2021）
・私は方言を話すが、別に学校で習ったわけでなく、家庭や周りの環境によって習得したと思う。アイヌ語も家庭や地域で継いでいくのは難しいのか？アイヌ語に対する偏見や、アイヌ語と標準語が違いすぎるなど様々な理由があるかもしれないが気になった。（2021）
・正直なところ、北海道には歴史が無いと安易に考えてしまっていた。アイヌの地に和人が勝手に侵入していったので、和人が想像するような歴史が少ないのは当たり当然だ。（2021）

参考文献

池上知子 2014「展望　差別･偏見研究の変遷と新たな展開―悲観論から楽観論へ―」『教育心理学年報』第 53 集、日本教育心理学会。
ガイ・ドイッチャー 2012『言語が違えば、世界も違って見えるわけ』合同出版。
北村英哉・唐沢 穣　編 2018『偏見や差別はなぜ起こる？心理メカニズムの解明と現象の分析』ちとせプレス。
キム・ジへ著　尹怡景訳 2021『差別はたいてい悪意のない人がする―見えない排除に気づくための 10 章』大月書店。
金明秀 2018『レイシャルハラスメント Q & A―職場・学校での人種・民族的嫌がらせを防止する』解放出版社。
金友子 2016「マイクロアグレッション概念の射程」
『〈抵抗〉としてのフェミニズム』（生存学研究センター報告書［24］、堀江有里・山口真紀・大谷通高編）。
小宮友根 2019「表象はなぜフェミニズムの問題になるのか」『WEB 世界』
（https://websekai.iwanami.co.jp/posts/2828　）
佐藤裕 2018『新版　差別論－偏見理論批判』明石書店。
デラルド･ウィン･スー 2020『日常生活に埋め込まれたマイクロアグレッション　人種、ジェンダー、性的指向、マイノリティに向けられる無意識の差別』明石書店。
文光輝 2021「パワーハラスメント防止法の対象となったレイシャルハラスメント」
『アイヌ・先住民研究』1 号、北海道大学アイヌ・先住民研究センター
（https://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/bitstream/2115/80889/4/06_Racial%20harassment.pdf）。
ロビン・ディアンジェロ 2021『ホワイト・フラジリティ』明石書店。

（2022 年 10 月 1 日受付、2023 年 1 月 9 日審査終了）

Microaggressions to the Ainu People at Institutions of Higher Education

Mokottunas,KITAHARA*

ABSTRUCT

This paper examines microaggressions in the working and learning environment of the Ainu people, using university organizations as an example of microaggressions and their countermeasures. Microaggression in universities occurs not only from faculty members to colleagues and from faculty members to students, but also from students to students and from students to faculty members. Although the process by which students' perceptions are formed is not examined in detail in this paper, it is expected that students' utterances reflect the perceptions of society as a whole, since the content of their words and actions is very similar to those uttered by faculty and staff, and in some cases it is mentioned that they have incorporated the perceptions of society, including parents and faculty. By educating university constituents about the types of microaggressions, how they occur, their effects, and effective interventions when they occur in front of their eyes, it is expected that prevention and post-emergent responses will be possible.

Keywords: Ainu people, Wajin (japanese people), Microaggression, Elimination of Discrimination

* Center for Ainu and Indigenous Studies, Hokkaido University